



Messidor Ensemble

メシドール・アンサンブル演奏会

2016年5月22日(日)

ティアラこうとう小ホール

メシドール・アンサンブル演奏会

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン

フルート三重奏曲《ロンドン》八長調 Hob. IV-1 *

第1楽章: *Allegro moderato*

第2楽章: *Andante*

第3楽章: *Vivace*

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

フルート四重奏曲 ト長調 KV. 285a *

第1楽章: *Andante*

第2楽章: *Tempo di Menuetto*

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

弦楽四重奏曲 第4番 八短調 作品18-4 **

第1楽章: *Allegro ma non tanto*

第2楽章: *Andante scherzoso quasi Allegretto*

第3楽章: *Menuetto: Allegro*

第4楽章: *Allegretto - Prestissimo*

———— 休憩（10分間） ————

ヨハネス・ブラームス

クラリネット五重奏曲 口短調 作品115 ***

第1楽章: *Allegro*

第2楽章: *Adagio*

第3楽章: *Andantino - Presto non assai, ma con sentimento*

第4楽章: *Con moto - Un poco meno mosso*

フルート：金井 麻子

クラリネット：金内 智恵

ヴァイオリン：林 俊夫 (**Vn* ***1st Vn* ****2nd Vn*)

孫 尚卿 (***2nd Vn* ****1st Vn*)

ヴィオラ：大越 夏子

チェロ：坂本 謙太郎

2016年5月22日(日) 14時00分 開演

ティアラこうとう 小ホール

この演奏会にあたり池田菊衛先生（東京クワルテット 第二ヴァイオリン奏者）、
フランツ・バルトロメイ先生（ウィーン・フィル 前第一首席チェロ奏者）にご指導頂きました。

本公演の企画秘話～曲目解説に代えて～

本公演はフランツ・バルトロメイ氏^{*1}と筆者の酒の席で企画された。
他の出演者の与り知らぬところで…。

2015年11月某日、渋谷のバーにて
筆者（以下S）：私が主宰しているメ
シドール・アンサンブルの5月の演
奏会…そろそろ曲目を決めなけれ
ばならないのですよ。

バルトロメイ（以下B）：ほう。5月
なら“我々の本”^{*2}の出版のすぐ後
だね。折角ならそれにちなんだプロ
グラムはどうだい？例えば、私の祖
父^{*3}がウィーンでの初演をしたブ
ラームス(1833-97)の《クラリネッ
ト五重奏曲》とか。

S：それはアリですね。これは2002
年にメシドール・アンサンブルの第
1回演奏会で取り上げた曲です。14
年間で我々が歩んできた道を振り
返る上でも良いかもしれません。

B：2002年…結構続いているね。始
めたきっかけは何だったんだい？

S：結婚式ですよ。私の結婚披露パ
ーティの日に演奏会を開いたんです。

B：結婚式でこの曲？素晴らしいクラ
マチックだけど、ちょっと暗いとい
うか…。だってブラームスの最晩年
の曲だよ。枯れてない？

S：結婚生活ってそんなもんじゃない
ですか？たまに甘美で明るいけど、

基本は…。作曲の筆を折ろうとした
ブラームスが素晴らしいクラリ
ネット奏者に出会い、創作意欲を取
り戻して書いた曲…つまり、人との
出会いが人生に及ぼす影響の象徴
と考えると、そんな機会に相応しく
なくもないでしょう？

B：まあね。しかし人との出会いとい
うことならモーツァルト(1756-91)
の《フルート四重奏曲》も一緒に
どうだい？僕は二十歳の時、この曲
を中東演奏旅行で弾いたんだ。

S：旅先でアルメニア女性に一目惚れ
したエピソードと共に“本”に登場
した曲ですね。彼のフルート四重奏
曲4曲のうち、我々は第2番だけま
だ演奏していないので、良い機会だ
と思います。ところでモーツァルト
はフルートという楽器が大嫌い
だったらしいですね。当時のフルー
トは現代の楽器のように正確な音
程を出せなかったそうで…。

B：それでも頼まれればあんな素晴ら
しい曲を書いちゃうんだから、すご
いよね。

S：もう一人のウィーンの作曲家ハイ
ドン(1732-1809)はどうでしょう

^{*1} ウィーン・フィル／国立歌劇場の首席チェロ奏者を39年務めた他、同団の首席奏者達と結成した
キュッヒル四重奏団でも長年活動し、室内楽にも造詣が深い。祖父（首席クラリネット）、父（ヴァ
イオリン・副楽団長）につぐ三代目のウィーン・フィルの団員でもある。激しい蒐集癖の持ち主。

^{*2} フランツ・バルトロメイ著、坂本謙太郎監訳、坂本明美訳『この一瞬に価値がある～バルトロメイ
家とウィーン・フィルの120年』（音楽之友社刊）。指揮者クリスティアン・ティーレマンよれば「同
家の三代記であると同時に、緊張に満ちた120年の中欧の文化史でもある」（同書序文より）。

^{*3} フランツ・バルトロメイ一世：1892-1914年にウィーン・フィルの首席クラリネット奏者を務めた。
ブラームスやマーラー、ヨハン・シュトラウス二世とも直接の交流があった。

か？20 年も前に弦楽四重奏のマスタークラスを聴講した時に、アレクサンダー・シュナイダー氏（ブダペスト弦楽四重奏団ヴァイオリン奏者）が、「まずハイドンをしっかり勉強すべきだ」と言ったのが印象に残っています。ちっとも実践していませんけどね。あなたはキュッヒル四重奏団で、83 もある彼の四重奏曲、全てを演奏したのでしょうか？

B：アンサンブルの基礎を作る上でハイドンはたしかに大事だねえ。しかし、これほど難しい作曲家もない。彼の時代の音楽はBGMのような扱いだったから、心地良く聴けることが第一だった。ハイドンは結構それに抵抗して“毒”を仕込んでいるけど、それでも真剣に音楽に向き合う現代の聴衆を満足させるには、ラヴェル（1875-1937）のような技術的な難曲の方がよほど簡単だね。

S：ハイドンはお勧めではない？

B：いやいや。二つ提案だ。ハイドンについては《フルート三重奏曲》、いわゆるロンドントリオはどうだろう。仲間にフルートがいるなら、是非一度演奏しておくべき曲だ。

S：（その場で調べつつ）1794 年のロンドン演奏旅行中の作品ですね。

B：そう。晩年の、大作曲家としての評価が確立した後の作品なんだよね。貴族の依頼で作った曲だから軽いけど、完成度は極めて高い。

S：改めて聴いてみます。楽しみです。もう一つの提案は？

B：ベートーヴェン（1770-1827）の初期の《弦楽四重奏曲》だね。彼がウィーンに来たのは 1792 年だけど、

そこでハイドンやモーツァルトなどの先人に直接・間接の教えを受けた。それを彼なりに消化した成果として、6 曲からなる四重奏曲集《作品 18》を 1801 年に出版したんだ。シュナイダーが言う所のハイドンの要素もありつつ、弾きごたえ、聴きごたえも抜群だよ。

S：1801 年というと『ハイリゲンシュタットの遺書』の前年、段々耳が聞こえなくなり、腕自慢のピアニストとしては通用しなくなって来た頃ですね。

B：当時の作曲家は同時に名演奏家であることを求められたからねえ。

S：しかし、ベートーヴェンは耳が聞こえなくなったことで、西洋音楽市場史上初の「演奏をしない作曲家」「作曲専門家」になり、だからこそ、革新的な新境地を拓いたとも言えますね。6 曲の中でのお勧めは？

B：難しい質問だけど、強いて言えば第 4 番かな。4 番と言いつつ 6 曲の中で最後に作曲された曲で、ベートーヴェンの修業時代の総括とも言える曲だから。

～こうして曲目が決まった～

2016 年 4 月某日、筆者宅にて

S：（チラシを示し）昨秋のご助言に従って、こういう曲目になりました。

B：このチラシ頂戴！蒐集品に加えるから。で、練習は順調かい？

S：ええ。しかしハイドンはやはり難しいですね。楽譜の通り弾いただけでは、面白い音楽になりません。今日はメンバーを集めておいたので、聴いて貰えますか？

B：喜んで（…としばし演奏に耳を傾けた後…）うむ、指揮者ニコラウス・アーノンクールに拠ると、ハイドンやモーツァルトを演奏する時は、彼らの時代、つまり 18 世紀の常識を知る必要がある。例えばこの「ファ→ソ」。このように裏拍から表拍に二度進行する音にはスラーをかける（＝音を切らずにつなげる）というのが、当時は暗黙のルールだった。書くまでもないことだから、彼らの楽譜にはそんな指示は逐一書かれていないが、我々はそれを踏襲すべきだ。最近は作曲者が書いたことに忠実な『原典版』という楽譜が多く出版されているだろう？

S：後世の人間が書き加えた余計な指示をそぎ落としたものですよ？

B：案外「余計」ではないかもしれないんだ。作曲者の時代の常識を、それが常識でなくなりつつあった時代に書き込んでくれていたとも言える。一昔前、原典版以前の楽譜の方が音楽的には正しいってこともあるんだよ。指揮者クラウディオ・アバドは原典版に“忠実”で「モーツァルトが指示していないスラーを勝手に付けてはいけない」などと言ったものだけど、僕にはそれは窮屈に思える。作曲者の時代の常識で付けなければならないスラーもあるし、現代の奏者が自由な発想で付けるスラーもあって良い。

S：そんなことをして良いんですか？

B：勿論。過去の音を再現しているだけなら、意志を持った生身の人間が

演奏する必要はないよ。自分なりの工夫はして良いし、すべきだ。特にハイドンやモーツァルトにはその余地が大きいと思う。例えば繰り返し出てくる音型では、アーティキュレーション（＝音のつながり、区切り、長さ、強弱）を都度自由に変えてみたらどうかな。そういうことは 18 世紀の奏者もしていたはずだ。そして現在の演奏でそれをどう変えるかは我々に任されている。

S：都度自由に変える…それを日々繰り返し、新たな響きを探すのですね。ウィーンの響きの秘密、ウィーン・フィルが世界中の人々を魅了し続ける理由が一つ見えてきました。ウィーン・フィルは言わばクラシック音楽界の最先端の実験場なのですね。アーノンクールがウィーン・フィルにピリオド奏法（＝作曲者の時代の常識を尊重した演奏方法）をもたらした際のエピソードが“本”にありましたが、考えてみればそれも当時の最先端の活動です。ウィーン・フィルが生み出す新たな潮流、新鮮な響き…。それは伝統の奏法以上の魅力かも知れません。

B：そうかもね。そしてウィーン・フィルの実験を主導するのが首席奏者陣。僕たちはまず室内楽活動の中で実験をして、その成果をオーケストラに持ち帰るんだ。見たところメシドールも良い実験場になりそうだよ。ここから新しい何が生まれても良いはずだ。楽しみにしているよ。

S：おおっ！！頑張ります。

本稿は実際の会話を、筆者の記憶・妄想に基づき再現したものです。

各曲目の周辺情報は適宜補っている他、諸般の事情により表現等を捻じ曲げた箇所もあります。

メシドール・アンサンブル

「メシドール」とはフランス革命暦にある月の名前の一つで、現在の6月19日から7月18日に相当。初回の演奏会がこの時期だったことが団体名の由来になっている。語感の爽やかさとは裏腹に日本では梅雨に当たるため、近年はやや早い時期に演奏会を開催することが多い。

演奏会のたびに「いつか演奏したいと思っていた曲」を携えた有志が集う緩やかな集団を標榜している。楽器編成・メンバーは毎回変わるため、これまでの出演者は社会人・学生・主婦・職業音楽家まで41名にのぼる。

これまでの演奏会

第1回（2002年7月13日 於：新宿文化センター 小ホール）

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第1番 二短調 Op. 49（フルート版）

ブラームス：クラリネット五重奏曲 口短調 Op. 115

第2回（2003年7月6日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール）

ハイドン：弦楽四重奏曲 二短調「五度」Op. 76-2

ビゼー／シンプソン：フルート・チェロ・ピアノのためのカルメン幻想曲

ドヴォルジャーク：弦楽四重奏曲 ヘ長調「アメリカ」Op. 96

第3回（2004年2月15日 於：新宿文化センター 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 二長調 K. 285／オーボエ四重奏曲 ヘ長調 K. 370

アダージョとロンド 八短調 K. 617／ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 K. 478

第4回（2004年11月20日 於：ティアラこうとう 小ホール）

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第1番 変木長調 Op. 12

キュフナー（伝ウェーバー）：クラリネット五重奏のための 序奏、主題と変奏

シューベルト：ピアノ五重奏曲 イ長調「罇」Op. 114

第5回（2005年7月10日 於：ティアラこうとう 小ホール）

ヴォルフ：イタリアのセレナーデ ト長調

モーツァルト／ヴェント：フルート四重奏のためのオペラ『魔笛』より抜粋

チャイコフスキー：弦楽四重奏曲 第1番 二長調 Op. 11

房音くらぶ 音楽祭（2005年8月20日 於：南総文化ホール 小ホール）

モーツァルト：弦楽五重奏曲 第4番 ト短調 K. 516 より第1楽章

第6回（2006年4月30日 於：ティアラこうとう 小ホール）

モーツァルト／ロットラー：弦楽五重奏曲 第2番 K. 406 八短調（木管五重奏版）

ベートーヴェン：七重奏曲 変木長調 Op. 20

第7回（2007年5月13日 於：ティアラこうとう 小ホール）

ベートーヴェン：アダージョとロンド（六重奏曲 変木長調 Op. 81b より）

ボロディン：弦楽四重奏曲 第2番 二長調

モーツァルト：ディヴェルティメント 第17番 二長調 K. 334

第8回（2008年6月29日 於：ティアラこうとう 小ホール）

バッハ：管弦楽組曲 第2番 口短調 BWV1067

シューベルト：八重奏曲 ヘ長調 D. 803

美浜音楽祭（2009年3月21日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール）

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第1番 二短調 Op. 49（フルート版）

第9回（2009年6月21日 於：ティアラこうとう 小ホール）

シェーンベルク：浄夜 Op. 4（弦楽六重奏版）

ブラームス：弦楽六重奏曲 第1番 変口長調 Op. 18

第10回（2009年11月22日 於：ティアラこうとう 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 二長調 K. 285

プーランク：ピアノと管楽器のための六重奏曲

チャイコフスキー：弦楽六重奏曲 二短調 Op. 70「フィレンツェの想い出」

第11回（2010年7月3日 於：ティアラこうとう 小ホール）

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第7番<ラズモフスキー第1番> Op. 59-1

ラインベルガー：九重奏曲 変ホ長調 Op. 139

第12回（2010年12月12日 於：ティアラこうとう 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第4番 イ長調 K. 298

シューベルト：弦楽四重奏曲 第14番 二短調 D. 810「死と乙女」

ベートーヴェン：クラリネット三重奏曲 変口長調 Op. 11「街の歌」

J. シュトラウス2世／シェーンベルク：皇帝円舞曲 Op. 437（七重奏版）

第13回（2011年11月13日 於：聖路加国際病院 トイスラー記念ホール）

モーツァルト：クラリネット五重奏曲 イ長調 K. 581

ラヴェル：弦楽四重奏曲 ヘ長調

サン＝サーンス：トランペット、ピアノ、弦楽四重奏、コントラバスのための七重奏曲 Op. 65

第14回（2013年4月21日 於：ティアラこうとう 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第3番 ハ長調 K. 285b

セレナーデ 第13番 ト長調 K. 525「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」

ブラームス：ピアノ五重奏曲 ヘ短調 Op. 34

第15回（2014年5月25日 於：ティアラこうとう 小ホール）

R. シュトラウス：オペラ『カプリッチョ』より前奏曲／メタモルフォーゼン（弦楽七重奏版）

ブラームス：弦楽六重奏曲 第2番 ト長調 Op. 36

第1回 子供のための演奏会（2014年8月3日 於：南府中自治会館）

バッハ：ブランデンブルク協奏曲 第4番 ト長調 BWV1049 より第1楽章 他

第16回（2015年5月24日 於：ティアラこうとう 小ホール）

バッハ：『音楽の捧げ物』 BWV1079 よりトリオソナタ

『ゴルトベルク変奏曲』 BWV988（弦楽版）

第2回 子供のための演奏会（2015年6月6日 於：おき医院<府中市白糸台>）

三浦恵理子：アリア～バッハの無伴奏チェロ組曲第1番を伴奏にして 他

出演者の横顔

フルート：金井 麻子

上智大学管弦楽団、オーケストラ・ディマンシュ、幕張ベイタウンオーケストラ、美浜音楽祭祝祭管弦楽団等で首席奏者を歴任。結婚後姓は変わっているはずだが、チラシ制作担当者が変え忘れたため、以後旧姓で通している。現在は子育ての傍ら、メシドール・アンサンブル公認専属炊事係（飯どーる）を務める。

クラリネット：金内 智恵

10歳でクラリネットを始める。上智大学管弦楽団入部早々に常任指揮者汐澤安彦氏に見出され、長きに渡って首席奏者を務め、卒業演奏会ではウェーバーの協奏曲を演奏。当団には第1回でのブラームスの五重奏曲以来9回目の登場。現在は港南区ひまわり管弦楽団での活動の傍ら三児を育てており、育児・仕事・音楽活動を調和させる少子高齢化時代の模範的演奏者である。

ヴァイオリン：林 俊夫

5才よりヴァイオリンを始め、大阪大学交響楽団、大阪モーツァルトアンサンブル、東京ムジックフロー、アンサンブル70sなどでコンサートマスターを歴任。ヴァイオリンを田中直子氏（元オルフェウス室内管弦楽団コンサートマスター）に、ヴィオラを林徹也氏（元シュトゥットガルト室内楽団首席奏者）に師事。長年世を忍ぶ飯の姿を演じてきたが、今夏より音楽の道に専念する予定。

ヴァイオリン：孫 尚卿

ピアノを柳桂子氏、ヴァイオリンを上月恵氏・金田幸男氏に師事。早稲田大学交響楽団で2ndヴァイオリン首席奏者を務めて以来、久しく2ndの専門家として活躍してきた。新しい楽器を得たこともあり、近年はアイリスフィルハーモニックオーケストラのコンサートマスターを務めるなど、1stにも意欲的に挑戦している。

ヴィオラ：大越 夏子

音楽活動の誘いは絶対に断らないため、毎週土日は朝昼晩6コマの練習をこなすことも珍しくない。練習後の酒の誘いも絶対に断らないが、酔っても自分について多くを語らないため、人物像は謎に包まれている。過去一年間に「船で日本を巡る大学時代を過ごした」という新事実が明らかになったが、それによってますます謎が深まった感もある。

チェロ：坂本 謙太郎

チェロを菅野博文氏（昭和音大教授）、フランチ・バルトロメイ氏、合奏を齋藤純一郎氏に師事。当団を主宰する傍ら、江東オペラ管弦楽団等で首席奏者を務める。先ごろ師の三代記『この一瞬に価値がある〜バルトロメイ家とウィーン・フィルの120年』（音楽之友社）を翻訳・出版。経営コンサルタントとして頻繁に海外出張をしているが、余暇活動が派手なため、多くの人に何のための出張かと訝しがられている。

当ページの内容は若干の誇張と多分の言葉遊びを含んでいます。



メシドール・アンサンブル 第3回 子供のための演奏会

2016年9月18日（日） 11:00 開演

於：府中の森芸術劇場 ウィーンホール

サン=サーンス：動物の謝肉祭 他

詳細は随時当団ウェブサイトにてお知らせします

<http://artist.musicinfo.co.jp/~messidor/>